

心理教育とグループワークにおける 感謝エピソードの共有が居場所感に与える影響

—中学生の学校・学級での役割感に着目して—

学籍番号 219203

氏名 上田 佑衣

主指導教員 柿 慶子

副指導教員 庭山 和貴

1. 研究の背景及び目的

近年コロナ禍の影響で、友達や家族への感染リスクを恐れて登校ができない、友達づくりや友達との交流、運動時における制限によりストレスが溜まってしまっている等、様々な理由により不登校や不登校傾向にある子どもが増加しているとされている。また、令和2年度に児童生徒の自殺者数が前年と比較して大きく増加したことから、今後も児童生徒の心が不安定になることが見込まれている(文部科学省 2021)。このことから、学校・学級は今以上に安心できる居場所としての機能を果たす必要があると考える。そこで、本研究では、実習校の生徒の学校・学級での居場所感の現状を把握し、生徒が学校・学級に居場所があると感じることができるよう心の居場所をつくり、居場所感が向上するための取り組みを模索することを目的とする。

2. 基本学校実習 I・IIでの取り組み

基本学校実習 I・IIでは、主に授業観察、業務補助、給食指導、下校指導等を行い、生徒の現状を把握した。その中で、実習校の生徒の全体的な雰囲気は良く、非常に活発な生徒が多いことが分かった。また、実習校では学校規模ポジティブ行動支援を行っているため、教師からの継続したポジティブな声掛け等が行われており、生徒を否定することなく、肯定的に受け止めている。そして、その雰囲気が生徒にも伝わり、生徒同士によるポジティブな声掛け等も多く見られた。観察を続けていく中で、徐々に生徒が教師からの指示を受ける前に率先してお互いに声を掛け合い、行動する姿が見られるようになった。しかし、その反面、欠席者の数が徐々に増加の傾向にあるという現状もあり、生徒の雰囲気は一見良くはなっているが、まだまだ不安定な部分が多いということも分かった。

3. 実践課題研究 I～IV及び実践

実践課題研究 I では、実習校の生徒の居場所感の現状を把握するため、学校・学級での居場所感に関する4件法の質問紙調査を実施した。調査結果から、「本来感」と「被受容感」

は、高いが「役割感」は低いことが分かった。平素より、誰かの役に立つような行動をしている姿が見られており、教師からの継続したポジティブなフィードバックが行われているにも関わらず、生徒自身の誰かの役に立っていると感じるためのハードルが高く、生徒同士によるポジティブなフィードバックでなければ伝わらないのではないかと考えた。

実践課題研究Ⅱでは、実習校の生徒が学校・学級に「居場所があると感じる時」と「居場所がないと感じる時」はそれぞれどのような時であるのかを把握するため、居場所感に関する自由記述式の質問紙調査を実施した。調査結果から、居場所の有無の感じ方には、友達関係や自分が周囲の役に立っていると実感できているか等が関わっていることが分かった。

以上の調査結果を踏まえて、「役割感」に着目し、「感謝をすること・されること」に焦点を当て、居場所感に関する実践を行った。実践内容は、心理教育とグループワークにおける感謝エピソードの共有である。心理教育で居場所感に関する理解を深めてからグループワークを実施し、その後にグループ内で感謝エピソードを共有した。

実践課題研究Ⅲでは、実践前後で居場所感に変化があるのかを見るために、居場所感に関する4件法の質問紙調査の2回目を実施した。調査結果から、「本来感」と「被受容感」については、介入群と統制群どちらにも有意な差が見られたが、「役割感」については、介入群にのみ有意な差が見られた。どちらの群も「本来感」と「被受容感」が向上したのは、実習校が取り組んでいるポジティブ行動支援の積み重ねによる結果であると考えられる。また、介入群にのみ「役割感」が有意に向上したことから、心理教育とグループワークにおける感謝エピソードの共有が「役割感」を向上させるための方法として有効であることが示唆された。

実践課題研究Ⅳでは、実践前後で学校・学級に「居場所があると感じる時」と「居場所がないと感じる時」のそれぞれについての考え方に変化があるのかを見るため、居場所感に関する自由記述式の質問紙調査の2回目を実施した。調査結果から、友達と会話している時に居場所があると感じる割合が増え、1人である時に居場所がないと感じる割合が増えたことが分かった。これは、心理教育を行ったことによって、生徒自身の居場所への捉え方、感じ方が変化したからであると考えられる。

4. 総合考察

本実践課題研究では、実習校の生徒の学校・学級における居場所感についての調査から、「本来感」「被受容感」「役割感」のうち、「役割感」に着目して、心理教育とグループワークにおける感謝エピソードの共有を行った。実践後、介入群のみに「役割感」の向上が見られたことから、「役割感」を向上させるための方法として心理教育とグループワークにおける感謝エピソードの共有が有効であることが示唆された。この結果から、教師をはじめとする大人からのポジティブなフィードバックを行うことはもちろん大切であるが、それ以上に生徒同士で認め合い、感謝し合うことの方が居場所感向上には大切であり、そのために教師は生徒同士が互いに認め合い、感謝を伝え合えるような関係性づくりや環境づくりを行っていくことが大切であると考えられる。

今後の展望として、今回は、中学校3年生の保健体育の授業内で行ったが、他教科や様々な場面、あるいは中学校1年生の中学校生活の地盤づくりの一環として行うことで、不登校予防につながるのではないかと考える。